

## 2018年ルール改正案について

バドミントンマガジン1月号で、BWF（世界バドミントン連盟 会長ポール・エリック・ホイヤー会長）が、2020年の東京五輪に向けて、ルールの一部を改正を考慮していることを報じた。

1つは、スコアリングシステム、2つめは、サービスフォルトの1つであるアバブ・ザ・ウェストについてである。

前者は、BWFの公示を付加すると、現在の21点3ゲーム制を

21点1ゲーム、15点3ゲーム、または11点5ゲーム制  
に変えようとするものである。

2006年に試合時間を短縮するために、ラリーポイント制とともに15点3ゲーム制を21点3ゲーム制に変えた。

しかしながら、国際大会のように技能の高い選手同士の試合では100分を超える試合が多々あって、目的が果たせていなかったのが、その改正の理由であるようだ。

この提案は5月のトマス・ユーパー杯大会のとき開催されるBWF総会で全加盟国の投票により採決される。

もし、採択されれば国内では初めてのシステムになるので、その対応が急がれる。

後者は、正しいサービスか否かの判定はサービスジャッジによるもので、たびたびプレーヤーが不満の表情を見せる場面を見受ける。それを機械的に判定しようとするもので、サービスのとき、「シャトルがラケットで打たれる瞬間に、シャトル全体がコート面より115cm以下でなければならない」とするものである。

ところで、現行のルールによるウェストラインの高さは、私の試算では、身長と靴の高さを加えた長さを1とすると約0.58となる。

これを、松友美佐紀さん（身長159cm）に当てはめると、ウェストラインの高さは約92.4cmとなり、115cmは22.6cmも高くなる。

この提案は、身長の高いプレーヤーにとって有利に見えますが、デンマークのカミラ・リタ・ユールさん（身長183cm）に当てはめてみると、約106.4cmとなり、115cmを超えないのである。

115cmが採択されると、サービスのとき、サーバーがレシーバーより有利になることが否めない。そこで、BWFが115cmと定めた根拠を知りたい。

この規定の検証は、3月に開催される全英大会などで試行され、総会で諮られる予定である。

BWFの2つの提案を、果たして世界のプレーヤーらが支持するかを見守りたい。

「ゲームはプレーヤーのためのものであることを旨とする」を忘れてはいけない。

以上